

戦場からの 告発

アメリカがイラクにこだわる
5つの理由

イラク開戦5年、8回の現地取材を敢行。
大手メディアが伝えなくなった悲惨な現実をリアルにレポート。
背景の石油マネーの実相にも鋭く迫る。

西谷文和

この惨劇を
終わらせるために



西谷文和の「戦争あかん」シリーズ2

戦場からの告発

アメリカがイラクにこだわる5つの理由



西谷文和

せせらぎ出版

もくじ

はじめに..... 3

第1章

ムラート君を救え.....

5

デンジャラス！／鳴り響くサイレン／地面にこびりつく血／この子を助けてくれ！／決死の救出劇／ムラート君を運ぶぞ／突っ走る救急車／つながった〃命の糸〃／爆弾国道／テロの街／ねらわれた子どもたち／日本の大臣感覚／その後のムラート君

第2章

クルドの悲劇.....

23

まっすぐな国境の謎／独・英帝国のはざま／油田の利権／国境の村

第3章

イラク難民.....

33

あふれかえる難民／新しい凶悪兵器か？／〃希望も援助もない〃／難民の街のバスターミナル／もう一度サッカーをしたい／意識不明の母から出産／国連のオモテとウラ／国境を越えられない〃避難民〃／戦争孤児に届いた学用品

第4章

アメリカがイラクにこだわる5つの理由.....

45

魅力たっぷり、イラクの油田／至上命令のドル防衛／石油価格は何で決まるか／イスラエル防衛／軍産複合体の圧力／アメリカはイランを攻撃するのか？／カジノ経済と戦争

おわりに..... 62

コラム

携帯電話と仕掛け爆弾・10／麻薬と暗殺、自爆アロ・21／バグダッドの壁・44

はじめに

かつてイラクへは、東京→バグダッドの直行便があった。フセイン像が倒されたことで有名になったフィロードス広場のすぐ横に、JALの看板がかかったオフィスがある。もちろん今は看板だけだ。そう、ベイルートやアンマンと比べて、バグダッドは日本から近い都市だった。湾岸戦争、そして今回のイラク戦争後、バグダッドは大変遠い街になった。

私の場合、まず関空からドバイ経由でアンマンまで飛ぶ。アンマンで通訳と入念な情報収集をして、イラクへ。イラクへの飛行機は、平気でキャンセルになったり、数時間遅れたりするので、予定はあてないようなものだ。

この「予定は未定状態」に加えて、日本の外務省から「イラクには入らないでください」と再三の「指導」が入る。2005年11月、アンマンでイラク行き航空チケットを买おうとした時、航空会社の職員が「日本人にはチケットは売れません」と言い放つ。なぜだ？「日本外務省からの通達で、日本人には売ってはいけないことになっている」。

「おいおい、そこまでやるのか」と半ば呆れ、半ば感心したのだが、あの頃は自衛隊がサマワに派兵されていたのだ。確かに香田証生さんがアルカイダ系のテロリストに殺されるという痛ましい事件の直後だけに、「これ以上の日本人を殺させてはならない」という外務省の気持ちは理解できないことはない。しかし「邦人保護」という大義名分の影に、政治臭がブンブン漂うのもまた事実だ。私がイラクに入れば、サマワを訪問しただろう。今の自衛隊が何をしているのか？きれいな水はどれくらい供給されているのか？現地の人々は歓迎しているのか、それとも「軍隊は帰れ！」と叫んでいるのか？どうして迫撃砲が連日のように自衛隊基地に撃ち込まれているのか？……。私のような「サマワに行きたがる日本人」は、政府にとって大変迷惑なヤツだったのだろう。そんなヤツらは水際で止めてしまえ！

アンマンのイラク大使館で「ビザを出せ」「出さない」でもめたとき、係官は最終的に「日本政府のお墨付き文書がないと出せない」と回答した。「日本政府からの推薦文なんて出るはずがないじゃないか！」と抗議するがラチが明かない。怒って帰る私の背中に「NHKなどの『ちゃんとした』メディアは政府の文書を持っている」とも。くっそー！

そこで通訳ハリルと一計を案じた。おそらくバグダッド空港ではビザは取れない。バスラだ！ バスラの有力部族に頼んで、空港で待ってもらおう。彼らに招待状を書かせて、西谷を特別ゲストにする。大丈夫、人道支援物資を運ぶためのだから……。

2005年11月29日早朝、ハリルと私は、アンマンからバグダッド経由バスラ行きの便に乗り込んだ。バスラの部族からは、「準備万端、空港で待っているよ」とのメールが届く。よし！

午前10時。バグダッド空港に到着、すぐさまトランジット（乗り換え）便のカウンターへと走る。カウンターでは空港職員が「バスラ！ バスラ！」と叫んでいる。乗り継ぎにはあと30分しかない。その時だった。「日本人は、バスラに行かせない」。入管の職員が私たちをさえぎる。「なぜだ？」「日本政府からの命令だ」。その後「通せ」「通さない」とひと悶着。交渉の結果「あなたが人道支援のNGOなら入国許可。ジャーナリストなら不許可」ということになった。係官はバグダッドの日本大使館へ電話。待つこと十数分、「日本大使館は、西谷はジャーナリストであってNGOではないと言っている」。

かくして私はバグダッド空港からアンマンまで強制送還された。日本政府がそうまでして私を入国させなかったのは「邦人保護」なのか「サマワを見られたくない」のか……。

ただハッキリと言えることは、サマワから報道陣が消えて、現地の状況が全く伝わらないまま、数百億円もの血税が消えていったこと。そして陸上自衛隊が帰ってきた今、その活動の検証は全く不十分で、ほとんど報道されなくなってしまったという事実である。

本書では「その後のイラク」を、自爆テロの実態やクルド地域の新たな火種、あふれ出すイラク難民、そしてこの戦争の背後にあるマネーに焦点を当ててみた。最後までお付き合いいただければ幸いです。

2008年2月

西谷 文和



通訳兼運転手のファラドーン

第1章

ムラート君を救え

デンジャラス！

「いいか、取材に使う時間は一カ所で10分。さっとインタビューし、さっと移動する。お前たち日本人は目立つんだ。テロリストは携帯電話を持っている。第1検問で日本人が乗っていることがばれたら、携帯で仲間を集め、第2検問で待ち伏せされる。そうなれば防ぎようがない。たいへん危険なんだ」。

通訳兼運転手のファラドーンが念を押す。明日訪問予定のキルクーク市は、油田で有名な町。その油田の帰属をめぐって、テロが頻発する激戦地なのだ。オーバーな身振り手振り

で、携帯電話をかけたり、銃をぶつ放す仕草をしながら「デンジャラス！（危険だ）」「キルク、ユー！（殺されるぞ）」を繰り返すファラドーン。いいヤツなのだが、なぜか少しうっとうしい。誰か、こいつを黙らせてくれへんかなあ。

2007年10月13日早朝、スレイマニア市を出発、キルクークをめざす。スレイマニア市はイラク北部のクルド人自治区に位置し、例外的に治安が安定している。PUK（クルド愛国者同盟）の護衛が二人、カシニコフ銃を下げて後部座席に乗り込む。スレイマニア市からキルクークまでは約100キロ、途中5カ所の検問があるので、約2時間の行程だ。

ファラドーンは飛ばす。信号もスピード違反の検問もないので、一般的にアラブ人は「飛ばし屋」であ

る。4カ所目の検問がちょうど峠になっていて、そこを通過すれば眼下に広大な街が広がっている。

鳴り響くサイレン

最後の、5カ所目の検問を通過すると、「アハラン・ワ・サハラン（ようこそ）キルクークへ」との看板。覚悟してきたとはいえ、実際に「キルクーク」の文字をみると緊張が走る。

市内に入って10数分、メインストリートでファラドーンが、突然車を駐車させる。「ウウー」。大音量でパトカーが通りすぎる。緊急事態が発生したようだ。臨時の検問が始まっている。

「やばっ、あいつテロリストとちがうか」。

凍りつく車内。肩にはカラシニコフ銃、黒マスクにサングラスの男が私たちの車に近づいてくる。

「俺たちはPUKの者だ。日本人を護衛している」。

ファラドーンが身分証を見せて、訪問の目的を説明する。男は地元警察官だった。勤務中に顔を見られてしまえば、勤務時間外にテロの標的となるため、覆面で自分自身を護衛していたのだ。翌日の地元テレビ



すわ、テロリストか？

ニュースでわかったのだが、ちょうどこの時キルクーク警察でテロがあり、警察署長が撃たれて死亡したのだ。何台ものパトカーがサイレンを鳴らして疾走していたのも無理はない。

地面にこびりつく血

覆面警官のチェックを終えて、自爆テロ現場へ。現場は下町の商店街。一昨日、道端に停めて



自爆テロ現場でインタビュー

あった自動車が爆発。10人が死亡、25人が重軽傷を負った。正面のビル内に破片が散らばっている。鉄の門扉がグニヤリと折れ曲がって転がっている。「爆発した車の残骸だ」もう一人の通訳、ヌルディンが車のホイールを拾いあげる。爆発地点から約20メートル、すさまじい威力だ。

ビルの隣は精肉店。ブロックが崩壊し、地面に血がこびりついている。

「ここで2人死んだ」。

ヌルディンの指差す方向に、別の遺体から流れた血。その血に無数のハエがたかっている。

「犯人はスンニ派系の過激グループとされている。しかし俺の知っているスンニ派の友人は、みんなよいヤツばかり。ごくごくわずかの『ならず者』がこんなことをする。この地域はクルド人が多く住んでいる地域だが、スンニ派もシーア派もいる。一旦こんなことが起きると、それぞれが報復テロの恐怖の中で生活しなければならない。殺されたのは兵士でも警官でもない。すべて一般市民だ」。

ヌルディンの案内で撮影を続けていると、野次馬た

おわりに

「米軍基地の拡張はごめんだ」。米軍と日本政府に対して、住民投票でノーという答えを出した山口県岩国市。その先頭に立って奮闘してきた井原勝介前市長が僅差で敗れた08年2月10日の晩、沖縄で少女が米兵にレイプされた。自民・公明の与党候補に投票した岩国市民は、今頃後悔しているかも知れない。その9日後、千葉県房総沖でイージス艦「あたご」が漁船を粉砕し、二人の漁師を冷たい海の底に沈めた。

基地と米兵、軍艦によって、国民の命と安全が奪われていく。もったいい加減にしてほしい。

沖縄と岩国、そして海に沈められた漁師たちと、イラクはつながっている。双方とも「普通に生きていくうえで必要ないもの」に、命を奪われている。

08年3月20日、イラク戦争は5年目を迎えた。「大量破壊兵器がある」という開戦理由はウソだった。満州事変も関東軍のでっち上げだったし、大本営発表はウソばかりで、結局、神風は吹かなかった。ベトナム戦争で北爆のきっかけとなった「トンキン湾事件」は、今や米軍の仕業だったということも判明している。

歴史を学べば、「戦争はウソで始まる場合が多い」ことが分かる。国家が発表することを、鵜呑みにしては危険だ。アメリカではブッシュとその周辺、日本では自民党とその周辺が大手メディアを握っている。北朝鮮の核実験など、アメリカや日本政府に都合のよいニュースは何百回と流されるが、イラクでの米軍犯罪は握りつぶされる。

しかし「だまされない」国民が増えてきたのも事実だ。憲法を守れ！ 格差を解消せよ！ 米軍に給油するより、我が家に油を！

このような声が確実に広がっている。本書が戦争に反対する人々を励まし、平和を求めるネットワーク運動の一助になれば幸いである。

イラクへの入国を前にして

参考文献

- 『裏切りの同盟』ロバートベア著 柴田裕之訳 NHK出版
『週刊エコノミスト』08年1月15日号
『民営化される戦争』本山美彦著 ナカニシヤ出版
『ピークオイル』リンダ・マクウェイク著 益岡賢訳 作品社
『陰謀国家アメリカの石油戦争―イラン戦争は勃発するか!?』
ステイーブン・ペレティエ著 荒井雅子訳 ビジネス社
『地図で読む 現代戦争事典』フランソワ・ジュレ著 山本光久訳 河出書房新社
『ドルの崩壊と資産の運用』ジェームス・ターク、ジョン・ルビノ著 渡辺博文訳 同友館
『イラク戦争 日本の分け前』浜田和幸著 光文社
『シーア派』桜井啓子著 中公新書
『エシロンと情報戦争』鍛冶俊樹 文春新書
『中東現代史』藤村信著 岩波新書
『イラク 戦争と占領』酒井啓子著 岩波新書
『国富消尽―対米隷従の果てに』吉川元忠、関岡英之著 PHP研究所
『メー敗戦』吉川元忠著 文春新書
『HOUSE of BUSH HOUSE of SAUD』CRAIG UNGER 著



白血病のイラーフちゃん(4歳)と

西谷 文和 (にしに ふみかず)

1960年京都市生まれ。立命館大学理工学部中退。大阪市立大学経済学部卒業。吹田市役所勤務を経て、現在フリージャーナリストでイラクの子どもを救う会代表。イラクやアフガンで撮りためた映像や写真を各地で紹介し、平和の大切さを訴えている。

2006年度平和協同ジャーナリスト基金大賞を受賞。著作に、DVD「戦争あかん①」「戦争あかん②」、ブックレット『報道されなかったイラク戦争』（せせらぎ出版）、『危ない！この先は崖っぷち』（共著・憲法9条メッセージプロジェクト）などがある。

イラクの子どもを救う会 <http://www.nowiraq.com/>

- 装幀——濱崎実幸
- 漫画——高宮信一
- 写真——吉田 満

西谷文和の「戦争あかん」シリーズ ②

戦場からの告発 —アメリカがイラクにこだわる5つの理由—

2008年3月25日 第1刷発行

定 価 600円（本体571円＋消費税）

著 者 西谷文和

発行者 山崎亮一

発行所 せせらぎ出版

〒530-0043 大阪市北区天満 2-1-19 高島ビル2階

TEL. 06-6357-6916 FAX. 06-6357-9279

郵便振替 00950-7-319527

印刷・製本所 土山印刷株式会社

©2008 ISBN978-4-88416-171-2

せせらぎ出版ホームページ <http://www.seseragi-s.com>

メール info@seseragi-s.com



この本をそのまま読むことが困難な方のために、営利を目的とする場合を除き、「録音図書」「拡大写本」等の読書代替物への媒体変換を行うことは自由です。製作の後は出版社へご連絡ください。そのために出版社からテキストデータ提供協力もできます。



9784884161712



1920031005715

ISBN978-4-88416-171-2

C0031 ¥571E

定価600円(本体571円+税)

第1章 ムラー君を救え

第2章 クルドの悲劇

第3章 イラク難民

第4章 アメリカがイラクにこだわる5つの理由



もっと読む

●電子本（PDF版、税込420円）を購入する

●紙の本（税込600円）を購入する